KYOKYO 125

特　集　新制60周年記念大学改革シンポジウム

3人の学長が語る「連携を通じた教員養成の取り組み」を開催

特　集　京教の歴史をふりかえる

京都教育大学

＜表紙＞

『タコは足がながいよ』

附属京都中学校　１年　鍋嶋　一樹

＜裏表紙＞

『くわがた』

附属京都中学校　２年　奥西　玲央

附属京都中学校では、例年夏の行事として臨海学舎と林間学舎が行われます。D組の皆も、それらの行事を楽しみにして、練習をしたり準備をしたりしています。掲載の絵は、それぞれの行事のしおりの表紙を飾った作品で、「海」や「山」のことを想像しながら楽しく描きました。

National Institution for Academic Degrees and University Evaluation
NIAD-UE
UNIVERSITY
ACCREDITED
Mar. 2007

CONTENTS

広報第125号

＜表紙＞　附属京都中学校　１年　鍋嶋　一樹
＜裏表紙＞　附属京都中学校　２年　奥西　玲央

特集

2　新制60周年記念大学改革シンポジウム 3人の学長が語る「連携を通じた教員養成の取り組み」を開催
総務課長
福本　浩一

4　京教の歴史をふりかえる
企画広報課

海外見聞録

8　ジュネーブ郊外の大型ハドロン加速器でのアトラス実験
理学科准教授
高嶋　隆一

留学生の声

10　夢に見た国
研究留学生
Sakharovskaya Alina
サハロフスカヤ　アリーナ（ロシア出身）

研究余滴

11　教員養成6年制と京都連合教職大学院
大学院連合教職実践研究科長
堀内　　孜

京教学内探訪

13　附属図書館の紹介
附属図書館長
松良　俊明

附属学校園だより

15　幼稚園の生活にあるメンテナンス
附属幼稚園副園長
鍋島　惠美

16　「ほんものに学ぶ」
附属桃山小学校副校長
西井　　薫

17　認められることの喜び
附属桃山中学校副校長
髙木　英男

新任の先生から

18　数学科准教授　　深尾　武史

18　教育学科講師　　西村　佐彩子

19　国文学科准教授　　奥野　久美子

19　数学科教授　　柳本　　哲

卒業生の声

20　子どもたちの“もっとしたい！”があふれる学習を目指して
野洲市立篠原小学校教諭
安達　裕美

20　全てが意味のある時間
京都市教育委員会事務局・事務職員
合田　清香

ようこそ大先輩

21　私の思う教師道
元京都府立洛北高等学校長
坂下　和也

読者の皆さまへ・編集後記

23　地域連携・広報委員会委員長
武蔵野　實

新制60周年記念大学改革シンポジウム
3人の学長が語る「連携を通じた教員養成の取り組み」を開催

総務課長　福　本　浩　一

平成21年12月12日（土）に国立京都国際会館を会場として、新制60周年記念大学改革シンポジウム「3人の学長が語る『連携を通じた教員養成の取り組み』」を国立大学法人大阪教育大学、国立大学法人奈良教育大学及び本学の3つの国立大学法人が主催し、社団法人国立大学協会の共催のもとに開催いたしました。

このシンポジウムは、戦後、新たに制定された学校教育法（これを「新制」と言います。）の適用が、国立大学においては、昭和24年4月から施行され、昨年で数えて60年目にあたるため「新制60周年記念」となりました。

また、国立大学が平成16年4月に法人化され、本年度で第1期中期目標・計画期間の6年間が終了し、平成22年度からの第2期中期目標・計画期間（平成22年4月1日から平成28年3月31日まで）に向け、大学の機能別分化が求められております。

将来の我が国を支える子どもたちを育成するため、実践力のある優れた教員を養成するとともに、現職教員の研修を担う上で、近畿地区の3国立大学教育系単科大学がそれぞれの特色を活かしつつ、連携協力して相互補完関係を構築する必要があることから、以下の点について議論を重ね、シンポジウムの開催に至りました。

○　教員養成大学をめぐる昨今の動向
○　近畿圏に存する国立教員養成3大学の立ち位置
○　3大学で連携協力の在り方と方策について検討・協議を行い、推進に関する合意を得るところとなったので、それぞれの中期計画案に盛り込むこと

これを機に第2期中期目標・計画期間、3大学の連携協力を強固にしようと3大学の学長ら関係者が一堂に集ったものです。

なお、このシンポジウムは「国立大学に求められている役割を議論することにより国民が国立大学に期待する役割を知る機会とする」事業として、国立大学協会の「平成21年度大学改革シンポジウム」事業に選定されたものであります。

（位藤京都教育大学長）

シンポジウムは最初に、主催者を代表して本学の武

蔵野實理事（総務・企画担当）・副学長が挨拶を行い、続いて、文部科学省の徳永高等教育局長が「大学改革の課題」について基調講演を行いました。

徳永局長は、中央教育審議会大学分科会の審議事項に関連して話を進め、大学の質保証に関する欧米と日本との違い、大学の量的規模についての諸外国との比較分析、中央教育審議会答申における機能別分化など多岐にわたる課題について解説されました。

そのうえで、平成22年度から実施される「教職実践演習」の必修化など、教員養成・免許制度に関する最近の改革を踏まえて、大学間の連携の重要性を強調されました。

（挨拶を行う武蔵野理事）

（基調講演を行う徳永高等教育局長）

この後、長尾彰夫大阪教育大学長、長友恒人奈良教育大学長、位藤紀美子本学学長に徳永文部科学省高等教育局長を交えてパネルディスカッションを開き、司会を本学の堀内孜連合教職実践研究科長が務め、ｅラーニングを活用した授業の実施など「連携を通じた教員養成の取り組み」の具体的方向について意見交換を行いました。

このパネルディスカッションは、今日的な課題・話題（教員養成6年制、開放制のもとでの国立教員養成大学の在り方など）に関する感想や、方向性について大所高所から意見を述べ合って自由に意見交換を行うためのものでありました。

（司会を行う堀内連合教職実践研究科長）

冒頭でも記載しましたが、昨年秋以来、3大学が第2期中期目標・計画期間における連携の在り方について協議を重ねてきた結果、「3大学の連携協力の推進」「学生主体のセミナーや教員就職対策の充実」等について、3大学が同内容の文言を記載した「第2期中期目標・計画」の素案を作成したところです。

今後、第2期中期目標・計画を基本に、さらに第3期へと3大学の連携協力を強固にしていくために、検討・協議にあたっては、今日の教員養成をめぐる社会の様々な意見を踏まえなければならないと考えております。

京教の歴史をふりかえる

企画広報課

京都教育大学は昭和24年に京都学芸大学として設置され、昨年（平成21年）に60周年を迎えましたが、その前身は明治9年創立の京都府師範学校までさかのぼることができます。

ここではその歴史をご紹介します。

明治9年5月	京都府師範学校授業開始・創立。
昭和19年4月	京都青年師範学校が設立された。その前身は大正15年創立の京都府実業補習学校教員養成所である。
昭和24年5月31日	京都学芸大学は、昭和24年法律第150号国立学校設置法により、京都師範学校、京都青年師範学校を包括して、新制国立大学69大学の1つとして、設置された。
昭和26年3月31日	京都学芸大学に包括されていた京都師範学校、京都青年師範学校が国立学校設置法の一部を改正する法律（昭和26年法律84号）により、廃止された。なお、同法により附属小学校・中学校及び幼稚園が設置された。
昭和27年4月19日	特別教科（図画・工作）教員養成課程が設置された。
昭和32年3月31日	桃山分校が廃止された。
昭和32年9月1日	大学は、京都市北区小山南大野町1番地から現在地に移転した。
昭和34年3月31日	高原分教場が廃止された。
昭和34年4月1日	特別教科（保健体育）教員養成課程が設置された。
〃	学芸専攻科（教育学専攻）、（美術・工芸専攻）が設置された。
昭和35年4月1日	臨時養護学校教員養成課程（1年課程、半年課程）が設置された。
昭和38年4月1日	養護学校教員養成課程が設置された。
〃	学芸専攻科（保健体育専攻）が設置された。
昭和40年4月1日	附属高等学校が設置された。
昭和41年4月1日	国立学校設置法の一部を改正する法律（昭和41年法律48号）により、京都学芸大学は京都教育大学に、学芸学部は教育学部に、学芸専攻科は教育専攻科に、それぞれ改められた。
昭和42年4月1日	幼稚園教員養成課程が設置された。
昭和43年4月1日	特別教科（理科）教員養成課程が設置された。
昭和44年4月1日	附属養護学校が設置された。

比叡山を望む小山地区から現在地（京都市伏見区深草）に移転したのが52年前の昭和32年。移転当時は大学の周りにも畑が多く、田舎町ののんびりした雰囲気が残っていたそうです。

新キャンパスは旧軍用地を国から譲り受けて建設されたため、旧日本軍の施設も残っており、サークル棟などとして使われていました。現在、旧日本軍の建物で唯一残ってるのは職員会館。平成22年秋には改修工事を終えて「京都教育大学教育資料館　まなびの森」としてリニューアルオープンします。

京都教育大学の学園祭は、設置の年である昭和24年から始まりました。

第26回（昭和49年度）からはこの学園祭を「藤陵祭」と称するようになり、現在まで続いています。

昭和47年4月1日	附属教育工学センターが設置された。
昭和49年3月31日	臨時養護学校教員養成課程（1年課程、半年課程）が廃止された。
昭和49年4月1日	特殊教育特別専攻科（精神薄弱教育専攻）が設置された。
昭和50年4月1日	保健管理センターが設置された。
昭和52年4月1日	重複障害教育教員養成課程（1年課程）が設置された。
昭和55年4月1日	附属教育工学センターは、附属教育実践研究指導センターに転換された。
昭和63年4月1日	総合科学課程が設置された。
平成2年3月31日	教育専攻科（教育学専攻）、（美術・工芸専攻）、（保健体育専攻）が廃止された。
平成2年4月1日	大学院教育学研究科（修士課程）（学校教育専攻）、（障害児教育専攻）、（教科教育専攻）が設置された。
平成4年4月1日	大学院教育学研究科教科教育専攻に国語教育専修、技術教育専修が増設された。
平成4年4月10日	附属環境教育実践センターが設置された。
平成5年3月31日	重複障害教育教員養成課程（1年課程）が廃止された。
平成5年4月1日	特殊教育特別専攻科（重複障害教育専攻）が設置された。
平成6年2月1日	情報処理センターが設置された。
平成6年4月1日	大学院教育学研究科教科教育専攻に数学教育専修が増設された。
平成9年4月1日	小学校教員養成課程、中学校教員養成課程、養護学校教員養成課程、幼稚園教員養成課程、特別教科（理科）（美術・工芸）（保健体育）教員養成課程、総合科学課程は、初等教育教員養成課程、中学校教員養成課程、養護学校教員養成課程、総合科学課程に統合改組された。
平成11年4月1日	特殊教育特別専攻科（精神薄弱教育専攻）は、特殊教育特別専攻科（知的障害教育専攻）に名称変更された。
平成12年4月1日	初等教育教員養成課程、中学校教員養成課程、養護学校教員養成課程は学校教育教員養成課程に統合改組された。
	附属教育実践研究指導センターは、附属教育実践総合センターに転換された。
平成16年4月1日	国立大学法人京都教育大学が設立された。
平成18年4月1日	学校教育教員養成課程、総合科学課程は学校教育教員養成課程へ統合改組された。
平成19年4月1日	附属養護学校が附属特別支援学校に改称された。
	特殊教育特別専攻科が特別支援教育特別専攻科に改称された。
平成19年7月1日	附属特別支援教育臨床実践センターが設置された。
平成20年4月1日	大学院連合教職実践研究科（専門職学位課程）が設置された。

昭和31年から平成3年まで、毎年天の橋立で臨海水泳合宿研修が行われていました。「泳げない先生をなくす」ことを第一の目的として始まった行事ですが、４～６泊の日程を1回生を中心に200名余りが共に過ごし、学生同士や教職員との絆を深める場としても重要な役割を果たしました。水泳訓練の他にもキャンプファイヤーや地域の方との交流会など内容は盛りだくさん！　クライマックスは約3kmの大遠泳でした。

平成18年、大学のマスコットキャラクターとして「そったくん」が誕生しました。学生や地域の皆さんにとって大学をもっと親しみやすい存在にするという使命を負って、大学案内や大学オリジナル文具に登場するほか、オープンキャンパス、ふれあい伏見フェスタなどでも「着ぐるみ」となって活躍中！　未来の京教生や地域のみなさんをお迎えしています。

沿革略図

［京都市上京区第11組中筋町
京都御苑内旧准后里御殿を
仮校舎として創立］

［「師範学校令」公布により
学校名を改称］*

［「師範教育令」により学校名を
改称］**

京都府師範学校

○明治９年(1876)５月 授業開始・創立

○明治９年(1876)６月２日 開校式

○明治12年(1879)12月２日
京都市上京区下立売釜座に新校舎
建築移転
［京都守護職御役会津藩御用屋敷址］

○自 明治15年度　至 明治20年度
京都府師範学校に女子在学

園部分局
［自 明治 9年6月
至 明治11年1月］

京都府尋常師範学校

○明治19年(1886)４月10日 改称*

○明治21年(1888)３月
京都市上京区寺町荒神口松蔭町に
新校舎建築移転

京都府師範学校

○明治31年(1898)４月１日 改称**

○明治32年(1899)３月
京都府愛宕郡上賀茂村字小山に
校舎新築移転

○大正７年(1918)４月
校地は京都市に編入され
京都市上京区小山南大野町１番地と
なる

(女　子　部)

○明治19年(1886)１月23日
京都府女学校師範学科を
京都府師範学校に移設

○明治20年(1887)７月13日
京都市上京区寺町荒神口上ルに
女子部校舎新築

京都府女子師範学校

○明治41年(1908)４月１日　京都府師範
学校から独立して設立
京都市吉田町仮校舎で授業

○明治42年(1909)３月　新校舎完成
京都府愛宕郡大宮村

○大正６年(1917)12月　校舎移築
京都市伏見区桃山町井伊掃部16番地

○京都府立桃山高等女学校

併　設
［自 大正 7年4月
至 昭和18年3月］

京都府実業補習学校教員養成所

○大正15年(1926)４月１日

［京都府師範学校に併設］

京都府立青年学校教員養成所

○昭和10年(1935)４月１日

［「青年学校教員養成所令」公布］

京都青年師範学校

○昭和19年(1944)４月１日
［官立移管に伴い改称］

○昭和20年(1945)
［京都府船井郡高原村へ移転］

[「師範教育令」改正（昭和18年３月６日）により
官立移管、学校名を改称]***
（男子部）京都市上京区小山南大野町１番地
（女子部）京都市伏見区桃山町井伊掃部16番地

京都師範学校

○昭和18年（1943）４月１日 改称***

男子部・女子部
自 昭和18年度
至 昭和22年度

男女共学
自 昭和23年度
至 昭和24年度

[「国立学校設置法」公布（昭和24年５月
31日）新制国立大学設置]****

[「国立学校設置法」の一部改正により
大学名、学部名を改称]*****

京都学芸大学

○昭和24年（1949）５月31日 設置****

○昭和30年（1955）９月１日
京都市北行政区の発足により校地は
京都市北区小山南大野町１番地の地名表示
となった

○昭和32年（1957）９月１日
京都市伏見区深草藤森町１番地に校舎移転

京都教育大学

○昭和41年（1966）４月１日 改称*****

国立大学法人京都教育大学

******

京都学芸大学京都師範学校

○自 昭和24年（1949）５月31日
○至 昭和26年（1951）３月31日

京都学芸大学京都青年師範学校

○自 昭和24年（1949）５月31日
○至 昭和26年（1951）３月31日

京都学芸大学の設置・発足に伴い、京都師範学校、及び
京都青年師範学校の名称を変更

[「国立大学法人法」により
国立大学法人を設立]******

学芸学部

○昭和24年
（1949）
５月31日 設置

桃山分校

○昭和24年（1949）５月31日 設置
○昭和32年（1957）３月31日 廃止

高原分教場

○昭和24年（1949）５月31日 設置
○昭和34年（1959）３月31日 廃止

教育学部

○昭和41年
（1966）
４月１日改称*****

大学院教育学研究科
（修士課程）

○平成２年（1990）４月１日 設置

大学院連合教職実践研究科
（専門職学位課程）

○平成20年（2008）4月1日 設置

学芸専攻科

○昭和34年
（1959）
４月１日 設置

教育専攻科

○昭和41年
（1966）
４月１日 改称*****
○平成２年
（1990）
３月31日 廃止

特殊教育特別専攻科

○昭和49年
（1974）
４月１日 設置

特別支援教育特別専攻科

○平成19年
（2007）
４月１日 改称

ジュネーブ郊外の大型ハドロン加速器でのアトラス実験

理学科准教授　高　嶋　隆　一

平成16年度から平成21年度の6年間の期限で特定領域科研費「ヒッグス・超対称性」の分担者となっていました。これは、ジュネーブ郊外にある欧州原子核研究機関（CERN）で建設された大型ハドロン加速器（LHC）でのアトラス実験を行うための研究です。現代の物理学の特に基礎科学と呼ばれる分野でよくわからないのは、弱い相互作用を媒介する粒子（W、Z）の質量が極端に重いことです。これらは質量のない光子と同じものと考えられます。相互作用が弱いため太陽が燃焼するエネルギー放出がおよそ100億年も続くわけです。また、物質は6種類の質量のないクォークというものからできているはずですが、現実にはそれらに質量があり、その相互作用の規則の対称性も破れています。この対称性の破れという概念が物理学の上では大切なものであることを最初に指摘されたのが南部先生で、小林、益川の両先生はその破れを6種類のクォークに適用しました。ヒッグスとは質量のないはずのW,Zとクォークに質量を与える理論の仕組みから生まれる粒子です。そんなものが本当にあるのでしょうか。

この謎を解くために必要な実験装置は加速器と呼ばれ、地下100m の周長27ｋｍのトンネルの中に設置されています。粒子ビームの衝突点を囲む実験装置の名前は「アトラス」です。昨年春公開された映画「天使と悪魔」に出てくる実験装置で、よく目立つ大きな外側の粒子検出器は日本とイスラエルで作られました。

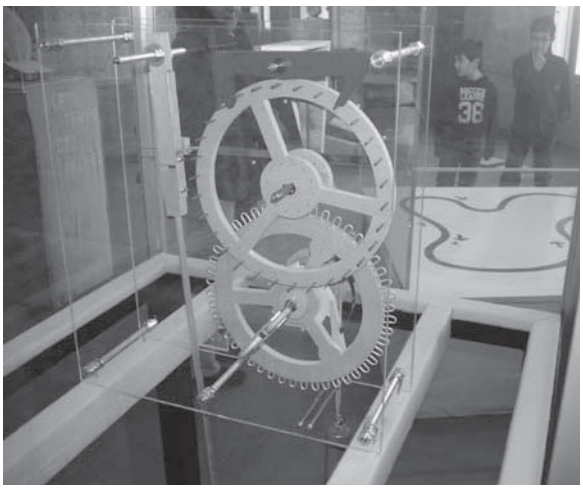
私の関係する検出器はシリコントラッカーと呼ばれ、装置の内側にあり粒子の飛跡を捕まえるものです。シリコントラッカーのセンサーは浜松ホトニクスという会社で作られ、ほかの国では作ることのできないものです。ただこの検出器の運転の基幹部分は英国がにぎっておりちょっと悔しい感じです。測定器のデータを読み出す装置は複雑でその部分を開発したのが英国だからです。

研究分担者になって日本グループの中で中心部飛跡検出器のデータ解析を行うソフトウェアについて勉強しろということになりました。ジュネーブ郊外のCERN研究所で年4回開かれる、中心部飛跡検出器と計算機ソフトウェアの研究会に参加するなど情報収集と発表をすることが必要になるわけです。最近では筑波の高エネルギー加速器研究機構（KEK）などがホスト的な役割をするテレビ会議システムやカルフォルニア工科大学がホスト的な役割をするパソコンテレビ会議システムEVOなどで会議の発表ができるようにもなっています。発表の材料は大学院生に作ってもらうことになります。またどの部分で発表するかの戦略を立てる部分は経験のある研究者が必要ですが写真のKEKの近藤先生や岡山大学の田中先生が中心になっていただきました。2005年にCERNの研究室の屋上でジュラ山地を背景に取った写真で、左側から岡山の美馬君（M1）、近藤先生、京都教育の山下君（M1）、岡山の内藤君（M2）です。

2006年には中心部飛跡検出器が組みあがりCERNで宇宙線テストを行いました。山下君はこのときのデータ解析で修士論文を書くことができました。また私は翌年のハワイの日米合同物理学会でシリコントラッカーのテスト状況ついての発表を行うことができました。同じ学会でアトラス実験の物理の発表枠が空いていることがわかり無謀にも特殊な粒子の検出部門で発表を行いました。

そのころはあまり物理解析の知識はなかったのですが、最近「ヒッグス粒子の自己結合」という物理のテーマで研究をする話がまわってきました。ちょうどいいタイミングで研究室に修士で武田彩希君が入ってくれたため、手間のかかる解析分野をかなり分担してもらえそうだということになりました。

写真は2009年の3月に2週間ほどCERNに滞在したとき、休日に筑波大学の原先生の提案でグリュイエールにチーズフォンデュを食べに行ったときの写真です。レマン湖の向こうの山地を背景に、左から武田君（M1）、筑波大学の塙君（M1）、原先生、林君（M1）です。武田君は博物館の学芸員にも関心があったのでジュネーブの科学の歴史博物館に行きました。そのときの特別展示は「時」に関するものでした。私も相対性理論の授業を担当していることもあり、振り子の等時性を発見したガリレオや振り子時計を発明したオランダのホイヘンス、木星の衛星の食周期の研究から光の速度を推定したレーマーなどに関心がありました。



この写真にあるのはホイヘンスの発明した時計の基本部分をなす「テンプ」の役割をわかりやすく説明した模型です。下側のギヤは錘に引かれて回りますが上のギヤの上に取り付けられた「テンプ」がうまくギヤの回転の速度を抑えます。その仕組みがわかりやすく展示されていました。この展示にも機械式腕時計がいまなお地域的な重要産業であるスイスのジュネーブの現状が反映されているといえるかもしれません。精密機械工業はスイスの特技ともいえるものですが、アトラス実験にもジュネーブ大学が参加し、シリコントラッカーのモジュールを搭載する大きなシリンダー設計加工を担当したようです。

アトラス実験に参加することにより、英国、スペイン、スイス、アメリカ、ドイツの研究者たちと接することが多いです。研究会でミュンヘンに行ったり、測定器の組み立て状況の視察にオックスフォード大学に行ったりして、自然にヨーロッパの文化や歴史に関心を持つようになりました。同時に日本の科学の貢献や世界史の中での見え方も気になるところです。

アトラス実験に日本で参加している機関の数は15で、京都教育大学はそのうち最小の単位といえます。それでもこの6年で2名の修士の学生が働いてくれたおかげで何とか研究室の水準を向上させることができて感謝しています。とくに米国での実験ではまったくブラックボックスであった測定器のデータ読み出しの電子回路について、武田君の働きで理解が進んだことは大変助かりました。やっぱり、頼りになるのは若い力ですね。

夢に見た国

研究留学生　Sakharovskaya Alina
サハロフスカヤ　アリーナ　（ロシア出身）

はじめまして。この作文の著者は世界一番幸せな人間の一人であります。小さなロシアの町に生まれ育ち、高校生のときから日本で生活してみたいと思っていた女の子です。なぜ日本に興味を持っていたのかと時々聞かれます。初めて高校旅行に行ったころ北海道の稚内市で三日間を過ごしてロシアに帰ってきたら、日本が好きになって、日本語を習いたくなりました。それは将来の運命を決める重要な見学旅行でした。その後、経済東洋学大学の日本語学科を卒業してから、京都教育大学に日本語教育を研究しに来ました。去年の四月に私の夢が叶ってしまいました！

気づかないうちにもうすぐ一年が経ちます。私にとって貴重な時間です。日本に行く前から色々な体験をしたかったのですが、その希望は全部実現しました。去年、生まれて初めてした経験は数え切れないほど多いです！温泉に入ったり、富士山に登ったり、亀の産卵を見に行ったり、日本海で泳いだり、カラオケで歌ったり、新幹線に乗ったり、日本あっちこっちを旅行したりしました。

サッカーの試合を見に行ったこととか、日本の大学でフランス語の勉強を始めたことなどは日本での留学している人にとってちょっと意外な体験もあります。大学の部活動を始めたときこそ私は本当の日本大学生になった気がしました。ダンス部、マンドリン部、茶道部、英語サークル、様々な活動に興味があって、時間だけ足りないくらい全部やってみたかったです。去年の文化祭で部活動のお陰でダンス部とマンドリン部と一緒に発表ができました！素晴らしい思い出になった忘れられない時間でした。

ロシアの大学と違って、日本の大学ではどんな科目でも選んでも良いと分かって、四月から日本語、日本語と世界の教育、文化、英語とフランス語を楽しみながら勉強しています。どんな授業でも受けてもいいので、実際に雑多な知識をもらえる可能性になります。

一番不思議な授業は泥団子の作り方の勉強でした。京都教育大学の方々は面白くて、オリジナルな人だと思いました。私の変な日本語を許して、優しく教えてくれる先生方に感謝し、尊敬しています。授業や部活動などで巡り会った大学生、今住んでいる国際交流会館の留学生の間で親しい友達ができて嬉しいです。チューターシステムもちょっとでも困ったときに、とても助かりました。私のチューターは素敵な友達になってくれました。ホームシックや寂しいときは友達の力で元気に戻ってた姿も留学の大事な経験の一つです。

祝日や休みに色々なプログラムがあるという情報が学生課から手に入り、できるだけ体験したいと思って、Japan tentというプログラム、ホームステイ、大学旅行などに参加してきました。自分で料理を作り始めたくらい私の一人暮らしの留学生活にも、今は親愛なホストファミリーがいて、サポートを感じながらもう寂しくならない留学になりました。

ロシアは寒い国だとよく言われても、家の中はいつも暖かいので今の時期は春を楽しみにしています。この大学に入学したころの桜の花見は本当にきれいでした。そのときからこの大学で勉強する決定はなんてラッキーだったとずっと思っています。京都は日本の心であり、歴史と文化で豊かな町として有名だし、必ず京都で留学したいと夢に見ました・・・日本人の心も分かりたかった私は今も研究中ですが、さらに、異文化のお陰で自分の出身、文化、自分の心をより良く分かって、自分の道を歩み始めます。

感謝と幸せで胸がいっぱい、充実した日々を送りながら、新しい発見、新しい夢に向かって京都で夢のような生活を続けています。

教員養成６年制と京都連合教職大学院

大学院連合教職実践研究科長　堀　内　　孜

1．はじめに

本稿のテーマがこの「研究余滴」というコラムに適しているかどうかについては疑問の残るところである。このテーマを本学の設置する教職大学院の今後の在り方、ひいては本学の将来構想に関わって論ずることは、筆者の「研究」とは範疇や次元を異にするだけでなく、その所掌や権限を越えることになるからである。とはいっても依頼されたテーマがこの教員養成6年制と教職大学院の関係であるので、敢えてこの「研究余滴」というコラムを「方便」として、研究の視点から本京都連合教職大学院や本学の今後の「ありうべき」姿を提起することをお許しいただきたい。

さて先の総選挙で政権党となった民主党が、そのマニフェストにおいて教育改革の一つに教員養成制度改革を掲げ、「教員の養成課程は6年制（修士）とし、養成と研修の充実を図ります。」とした。未だその具体の検討に入っていないが、2004年度の小中学校教員新規採用数を基礎に28,700人を総定員とし、全都道府県に1学年定員を1,200人、教員数80人、事務職員数30人の教職大学院を設置する構想が示されている。（鈴木寛文科副大臣HP）そしてこのマニフェストに対して既に各方面から、その意義や必要性、効果、また実施できる可能性等について多くの批判がなされている。

本稿ではその個々について検討することは出来ないが、教職大学院の設置に関わり、2年間その運営を担当した立場から、本学における「理念的」かつ「現実的」な教職大学院を核とした教員養成6年制の在り方を提示したい。

2．教員養成高度化の背景・必要性

この教員養成6年制については、既に多くの批判がなされている。それは第一に毎年2万人を超える小中高の新規採用数に対して、現在の教職大学院の院生定員が824名であり、また既存の大学院修士課程で専修免許を取得して教員になる者も限られていることから、毎年2万人を超える教員需要に供給が対応できない、とする量的側面における非現実性についてである。第二は、この6年制を成り立たせ、維持するのに、教職大学院の設置、維持経費だけではなく、教職志望学生を誘引するに足る教員給与の引き上げが必要であり、その見通しが示されていないことに対する財政的側面からの批判である。そして第三として、「理念的」な批判がなされている。それは教員の資質や能力は学歴と関係せず、小中学校の教員養成は学部レベルで十分とする「素朴」なものから、教員資格として修士号を求めることは「開放制」原理の否定に繋がるとするものまで多様であるが、第一と第二の点が解決されないままに6年修士課程に転換されれば優秀な学生が教員にならず、量的にも不足をきたすことと関わらせて論じられることが多い。これらの批判はそのほとんどが「正当」であり、教員養成6年制を具体化するためには解決されねばならない課題を提示しているといえる。だがこうした課題があるから、6年制が否定されるべきとするには別の論議が必要であろう。

本学で長年、教員養成教育に関わってきた立場から、学生が教師として子どもに接するに求められる人間としての成熟性が4年間で十分に培われなくなってきたことを看過できなく思っている。これは勿論、教師を目指す学生に限ったことではないだろうが、子どもの成長発達に直接関わる教師に就く学生にとっては極めて大きな問題と言わざるをえない。

1988年、1998年の2度にわたる教免法の改正は、「実践的指導力」の育成強化を目指すものであったといえるが、この基盤に人間としての成熟性がなければ、それが発揮されることはない。学校教育の問題状況から、それに対応できる「実践力」の育成が教員養成教育に求められることは理解できるが、それによって学生が広い教養や多様な経験を4年間で培うことがいよいよ困難となってきたのではないだろうか。

教員養成の高度化、6年制や修士課程での養成は、親の学歴が高度化したり、諸外国の養成期間が長期化してきた、ということからだけではなく、今日の日本の社会状況から学生が教職に就く上で求められる知識や技術、そして人間的に成熟していく自己形成のための教養や経験をえるために絶対的に必要な時間を確保することから検討されるべき段階に至ったといえる。

3．教職大学院の制度設計と京都連合教職大学院

教職大学院が、「実践的指導力」の育成を図るべく設置されたことは確かであるが、それは初任教員と中堅教員の2つの層を対象に「スクール・リーダー」の育成を課題とする「専門職大学院」とされたことにおいて、次の2点が含意されていた。第1は、既に教員

養成の大学院が設置されているが、それらの「整理」を強く求めつつ教職大学院が設置されたことは、既存の大学院が教員養成における有用性において「否定」されたことである。第2は、教職大学院を専門職養成機関たる専門職大学院という制度類型において設置したこと、そしてその拘束的なカリキュラム内容の明示も含めて教職を専門職として位置づけたことである。だがこのことは、今後において既存の大学院での教員養成を教職大学院に収斂させていくこと、教職を「専門職」として制度的に位置づけ、その養成を教職大学院で行うとする以上、それは限られた一部の「スクール・リーダー」の育成としてではなく、教員養成の基本とされねばならないことを意味している。

だが設置された教職大学院は、その質量においてこの課題に応えることができない。つまりそのカリキュラムは教科指導に関するものはあっても教科内容については想定されていない。そしてこの点に関わって小学校、あるいは義務教育学校の教員養成を担えても、高校、中等学校の教員養成からは距離がある。また設置申請に対する抑制的認可が文科省担当者から伝えられ、創設2年で実際の免許取得者数（約12万人）はもとより実採用者数（約2万人）に対しても比較にならない24大学で824人の定員となっている。国立の単科教育大学のほとんどが設置したものの教育学部は一部に止まり、また私学は小学校教員養成課程を持つ数校のみの設置となっている。だが免許取得者、教員入職者の絶対数は、小学校も含めて私学が過半を占めているのが実態である。

この中で、本研究科は唯一、国立大学たる本学と7私学とが連合で設置した教職大学院であり、連合構成私学の中には中等学校教員の養成課程のみをもつものも含まれている。本学が、というよりも筆者が本研究科の設置に関わったのは、上で述べた観点において教員養成の高度化が必要であり、必至となること、だが既存の大学院にそれを委ねることがこれまでの社会的評価から困難であること、また中等学校教員を中心とする私学での教員養成との接合を図ることが必要となると認識したからである。本学の内部においては、教職大学院を教育学研究科の学校教育専修の一部を移してそのコアとし、教科内容を主とする教育学研究科とほぼ同数の定員（57名に対して60名）を持つ教育学研究科と並立する独立大学院とすることによって、将来的な大学院再編を視野に入れるものとなった。

4. 教員養成6年制への京都連合教職大学院の再編

本研究科は、その「理念」として「人間教師をめざして」を掲げ、「豊かな知性と感性、確かな学識と教養を持ち、創造的にその実践を担うことのできる教員」をめざしている。それは既に述べたように、4年間の学部養成課程の持つ限界、課題を踏まえて、本研究科こそ教員養成の高度化を担うことができ、今後の改革の先駆となりうるとの自負を示すものである。

新政権の描く6年制（修士課程）教員養成の制度設計は先の問題点を含めて今後の課題とされようが、まず6年間の課程が、6年一貫か4年＋2年なのか、あるいはその併用なのか、ついでこの6年は連続するものなのか、4年と2年が時間的にインタバルを持つことができるのかが問われよう。そして採用数に見合う定数の大学院を用意するのに、国立―私立、養成系―一般系を問わず既存の大学院を活用するのかしないのかによって基軸が異なってこよう。また設置された教職大学院に対して、教科内容の高度化、高校教員の養成をどう位置づけるのかの検討も必要とされる。だが何よりも、この高度化―6年制／修士課程での養成が何を実現するものなのか、6年間のカリキュラムを軸にどのような内容が学生によって修得されるのかの論議が求められよう。本研究科の掲げる「人間教師」の育成が必要であり、そのために6年制／修士課程の教員養成制度の構築が今、求められている。

私学と連合し、本学において既存の大学院と並立する独立研究科としての位置を持つ本研究科が、この教職大学院モデルによる6年制／修士課程の教員養成において一つの先行事例となりうると考えている。だが国全体の制度設計にもよるが、大きくは次の2点を軸に再編していく展望が求められよう。第一は、教科内容の高度化、高校教員の養成に向け、また人的リソースの活用から、既存の教育学研究科との「融合」をいかに図っていくかである。そのためにはコース設定等の教職大学院の組織再編と教科内容科目の開発研究に通したカリキュラム構築が不可欠である。第二には、院生定数の量的調整からする私学との連合の見直し、再編をどのように展開していくのかについてである。40を超える大学が教職課程を設置している京都においては、複数の教職大学院のネットワークを想定し、現在の連合の構成が再編されると共に、学部で教職課程の維持を予定する大学の新たな受け皿となるべき教職大学院への転換が必要とされよう。

教職大学院をモデルとする大学院修士課程での教員養成制度を構築するために、本学、本研究科の再編はこのようにデザインされるものと考えているが、冒頭でも述べたように、それは教員養成制度研究の立場からの提示であって、本学全体の改革に関する意思決定に権限と責任を持たない立場からのものではないことを付言しておきたい。

附属図書館の紹介

附属図書館長　松　良　俊　明

大学附属図書館というものは、国内外のどの大学においても、大学を代表する建物のひとつとして位置づけられている。本学の現在の附属図書館が「大学の顔」としてふさわしい建物かと問われると少し心細い（写真1）。

写真1．図書館正面

建物そのものは後述のように問題を多く抱えているが、周辺の環境はさほど捨てたものでないと、私などは思っていた。入口近くの藪は、小規模な林ともいうべき環境で、筆者が担当する「自然観察法」という実習では土壌動物の採集地としてそこを大いに利用させてもらってきた。土壌表面の落ち葉の下にはダンゴムシ、甲虫類、クモ、ムカデなど、理科の教科書に出てくる小動物たちが容易に観察できるのである。ただし近年では美術科の岩村教授と学生さんらによる「作庭実習」により、無秩序だった林もすっきりした景観へと変貌を遂げつつある。

図書館内部についての話をしよう。本学図書館の沿革や蔵書数などについての詳しいデータは、図書館のホームページにある「附属図書館概要2009」を見てもらうといいのだが、ここでは主要な部分を少し紹介しておきたい。建物は大きく北館と南館の二階建て2棟と、その間をつなぐ4層の書庫から成る（写真2）。北館は昭和40年（1965年）に建てられた旧館で、その他は昭和52年（1977年）に増築されたものである。南北両館の移動通路はなぜか1階部分にしか設置されていないため、隣接する建物の2階同士の移動は、一度1階に降りて通路を歩かなければ往来できない。

写真2．図書館内部

蔵書数は和書25万冊、洋書6万冊、雑誌類は和雑誌が4,400種類、洋雑誌が1,200種類（いずれも概数）である。また大型コレクションとして、『米国教育情報センター資料』・『全英記録文書所在総目録』（いずれもマイクロフィッシュ）や『師範学校史・各教育史和文コレクション』などがある。

当館が所蔵する書籍の中でも、特筆すべきは『解体新書』であろう（写真3）。鎖国政策がとられていた江戸時代において、杉田玄白や前野良沢らの医者により、オランダ語の解剖書（『ターヘル・アナトミア』）が苦労の末に翻訳・発行された書物そのものが、きわめて良好な保存状態で保管されてきた。どのような経緯で当館に存在することになったのかは不明であるが、前学長の寺田光世先生が図書館長をされていた時にその存在が明らかにされ、ニュースとして全国紙に取り上げられたりした。同書の公開当時、私もこの有

写真3．『解体新書』の見開き

名な本を間近に見ることができ、感銘を受けた。人体各部の詳しい解剖図をまとめた図版本1冊と解説文4冊の全5冊からなる。この他にも『環海異聞』・『和漢三才図会』（写真4）などの和綴じ本や、中国の書籍『大平御覧（全1,000巻）』などの貴重書もあり、それらの一部は図書館内において一般に公開展示されたことがある。なお『環海異聞』は、江戸時代半ば、船の難破により世界一周を余儀なくされた東北・石巻の船乗りたちによる経験談が、聞き取りによりまとめられたものである。私事で恐縮だが、この本が展示される直前、そのことが書かれている吉村昭の『漂流記の魅力』を偶然読んでいたので、公開展示の折にはガラスケース越しにその挿絵を食い入るように見たものである。これらの貴重本は厳重に保管され、随時目にすることはできないが、書庫内には古書も多く、埃をかぶっているもののそれぞれの専門家から見れば貴重な本が眠っているものと思われる。現に私自身、生物関係の実に興味深い洋書を数冊見つけている。興味のある方は一度ゆっくり書庫内を閲覧していただき、「お宝」発見の節はぜひご連絡願いたい。

情報テクノロジーの発展した今日、図書館は書籍だけを取り扱う機関ではなく、著書・論文等の電子媒体としての学術情報も収集・発信している。本学図書館HPから国内外で発行されている論文集を検索したり閲覧したりできるようになっていることは、ご承知の通りである。昨年10月からは、国立情報学研究所（NII）の委託事業の援助を受け学術情報機関リポジトリ（repository＝情報などの「宝庫」の意）を正式に立ち上げることができた。これは大学や研究機関発行の論文集をはじめとする学術情報を収集し公開するもので、いわば「知の保管庫」である。収集・保管のみならず、当然、端末を通して閲覧が可能である。現在のところ、著者による許諾確認の関係で、比較的最近発行の紀要類しか本学では公開されていないが、一度図書館HP右上にある「クエリの森」というアイコンをクリックしてご覧いただきたい。なお図書館では、「教科書展」（図書館所蔵の明治時代から今日までの各種教科書の展示会）や「うたとおはなしの会」（幼児教育学科の平井先生と学生さんらによる幼児とその保護者向けの楽しいショー）といった地域住民にも開かれた催しも主催あるいは共催をしている。

図書館内部の説明はここまでとして、再び外部の環境について述べよう。この広報誌が発行された頃には、現在行われている「図書館増設工事」は完了しているかもしれない。図書収容スペースが満杯状態で、使い勝手の悪い建物構造になっているこの図書館を、大幅増設したいというのが積年の夢であった。しかしながらその実現は難しいものがあった。第一期中期目標期間の最終年度である平成21年度に、ようやくその一歩を踏み出すことができた。4階建ての建物を増設し、その1階部分は学生支援関連の施設として使い、2階より上は図書館として使用するという構想である。それが完成した暁には、図書館の玄関はメイン道路側に移動され、いかにも大学図書館という雰囲気が醸し出されていることだろう。ただし2階以上の図書館部分となる建物の増設要求が、国に認められたらの話である。つまり、目下工事中の1階および地下の基礎工事部分は、大学の自己資金でまかなっており、それより上の上層部分はあくまで計画段階にすぎない。しかし私たちは、遠くない未来にこの夢が現実化されると信じている。大きくなった図書館のコンセプトは「教育を考える図書館」である。知と実践力の備わった教員を養成するという本学の目的に役立つような図書館でありたいと考えている。

写真4. 『和漢三才図会』

幼稚園の生活にあるメンテナンス

附属幼稚園副園長　鍋　島　恵　美

【幼稚園のシンボル　イチョウの樹】

幼稚園には、園庭の中央にそびえる樹齢120年の母なる大きいイチョウが、私たちと共に暮らしています。この写真は、大寒の入りを迎えた頃のイチョウの姿です。1月初旬に3年ぶりの剪定をしました。

大樹だけあって職人さんが、3人がかりで丸一日かけての仕事となりました。園庭に大型トラックが入り、高く伸びたコンテナーに乗っての剪定です。かかる費用も〈ふにゃらら円〉と高額ですが、この仕事は、専門家に任すしかないことです。お金をかけただけあって、この姿は素晴らしいと感じ入っています。読者の皆様はいかがでしょうか？　均整のとれた勇壮に見惚れてしまいませんか？

このときに、根がずいぶん弱っているとの診断を受けました。そして、2月中に治療をするのが一番よいとのことで早速お願いすることになりました。またまた治療費がかかりました。しかし、この治療で元気になり、春に若葉をつけくれるならば、それに越したことはありません。私たちと四季折々の関わり合いがある樹ですから・・・

初夏には、若葉が茂り子どもやおとなに心地よい木陰をつくってくれます。その下で、子どもたちは、泥団子づくりや草花を使っての色水遊びなどに没頭しています。秋にはギンナンを実らせ落葉で園庭が黄色い絨毯を敷いたようになります。そして、冬には、このような裸木の勇壮な姿が、園庭に影となって子どもの視野に飛び込んできます。その影が、子どもたちの鬼ごっこの遊びで安全地帯になったりしています。

イチョウは、子どもとおとなにとって自然とふれあういい環境なのです。だからこそ、人と共に育ちあうイチョウにメンテナンスをして愛しんでやりたいと思っています。

【ほっこり　えん】

2008年度耐震工事の折に、一階保育室テラスを念願の木製デッキにするとともに屋根を付けてもらいました。それまでのテラスは、雨が降れば雨が吹き込み滑りやすくなるので安全管理から使用禁止としていました。が、今は天候にかかわらず遊び空間が広がりました。外部参観者の方からも、「建て替えられたのですか?」「以前より明るく広くなりましたね」との感想が聞かれ「そうでしょ!」と、経費をかけた効果は最大限で園の自慢のスポットになっています。

この縁側メンテナンスは、子どもとおとなの協働の手作業なのです。バケツに湯を張り、ぞうきん絞って両手をついて、身をかがめスースー！ぞうきんがけです。木製なので、木肌が荒れて刺立ちます。そこで、登場するのが廃品段ボールを丸めて作った特性〈たわし〉です。それを手にキュッキュッキュツと磨いていくのです。子どもとおとなが共に安全に快適に使える縁側になるよう手を入れていくのです。この作業も、子どもには楽しい遊びにもなっています。磨きながらおしゃべりしていたかと思うと、板と板との隙間に目を止め、その中を覗き込んで「アッ！○○がある!」「エッ?! どこ」と、のめり込み何があるかを探索し、それを取り出す方法を考え始めます。5mmほどの隙間です。糸の先にセロテープをつけてその粘着力で取り出そうとの試行錯誤が始まります。

好奇心が探求心へとつながっていく瞬間ですね。

つるつるぽかぽかとぬくもりのある〈ほっこり　えん〉となっています。

幼稚園教育の真髄は、環境を通した教育です。イチヨウも縁側もともにメンテナンスを加えて、園の中で私たちと共に暮らすかけがえのない環境のひとつとなっています。

「ほんものに学ぶ」

附属桃山小学校副校長　西　井　　薫

本校は、近鉄・京阪の丹波橋下車すぐのところにあります。非常に便利な場所にあり、桃山三校園（幼稚園・小学校・中学校）が隣接しています。また、京都教育大学に近いという「地の利」があります。

近年、大学と附属の連携が叫ばれ、大学の先生と附属の教員とが協力していこうという機運が高まってきました。　まだまだ全教科とまではいきませんが、昨年度より、大学と附属が連携した授業に取り組んできています。今年度取り組んだ内容の一部を紹介します。

自然から学ぶ（低・中・高学年）

本校の学校長は理学科生物学教授の坂東忠司先生です。今年度の初めに、校長先生に低・中・高学年に分けて子どもたちに自然についてのお話をしていただきました。

先生が、以前に研究のために行かれた南極の話と映像を紹介していただいた後、自然を通していろいろなものをただ漠然と見るのではなく、心の目で見ることの大切さをそれぞれの学年に応じて話してくださいました。子どもたちは、食い入るように映像を見たり、お話を聞いたりして、たくさんの質問が出ました。

モチモチの木（3年生）

大学からトチの葉と実を持ってきてくださいました。トチは3年生が国語で学習する「モチモチの木」のことです。坂東先生は、トチについていろいろとお話をしてくださいました。トチの実は「モチモチの木」にでてくるおいしいトチモチの材料ではあるけれど、そのままではとても苦い味がすることも子どもたちは実感しました。

音楽の授業では

大学との連携研究を進めていく中で、大学の先生方に教室に来ていただいて、ゲストティーチャーとして演奏していただくだけでなく、ワークショップをして本物の音の中で授業を進めています。

韓国の音楽（2年生）

大学の田中先生と韓国舞踊家金一志先生に韓国の音楽と踊りを教えていただきました。韓国と日本では拍の取り方が違っています。踊る時の歩き方も日本の歩き方とは違います。その違いを身体で感じながら、円になって踊りました。仕上げには、1グループずつが円の真ん中で習った踊りを発表しました。韓国の音楽を身体で感じる時間を過ごすことができました。

クラリネットとピアノ（3年生）

元音楽科教授の川口容子先生とクラリネット奏者の京子先生に来ていただきました。大きさの違うクラリネットをいくつも持ってきていただいて、その音色の違いを実感しました。実際にクラリネットに触れることができ、本物の楽器に接するよい機会でした。また、クラリネットが管をはずしてどんどん短くなってもきれいな音がでることを知り、子どもたちは驚いていました。

長調と短調（6年生）

長調と短調の聴きわけは非常に難しいものです。大学の斉藤先生にコーディネートしていただいて、ピアニストの山口先生、小笠原先生が、即興で曲を様々に変化させて演奏してくださいました。長調や短調の曲を調を変化させたり、速度を変化させたりして曲趣が変わることが実感できました。長調と短調の違いが実感できる贅沢な1時間でした。

大学の先生だけでなく京都教育大学の院生が子どもたちが学習した「魔法のすず」をオペラ風に演じてくださった取り組みもありました。

今後も、多くの学科で大学と附属が連携した取り組みを、積極的に進めていければと願っています。

認められることの喜び

附属桃山中学校副校長　髙　木　英　男

京都府や市の各種の体育大会での活躍、ディベート甲子園や英語スピーチコンテストでの入賞、新聞スクラップや論文コンクールまた自然科学観察コンテストなどでの数多くの優秀賞受賞をはじめ、今年度もたくさんの生徒が表彰を受けています。また総合的な学習発表においても高く評価され、新聞社からの取材も受けています。たくさんの人に認められる活動ができた、活躍できる場があったことに大きな意義を感じます。それぞれの生徒の努力をたたえるとともに、日々の地道な努力が評価されたことに教職員一同喜んでいます。英語学習発表会の金賞受賞と総合的な学習MET「こどもの食」コースの取り組みを本校の「学校からのお知らせ」より抜粋し紹介します。

〓金賞・銅賞受賞！京都市中学校英語学習発表会〓

11月8日に京都市中学校総合文化祭の一環としての英語学習発表会が京都市立洛友中学校にて開かれました。本校からは、1年生の有志約40名がステージ発表に、2年生1名が英語暗唱発表に参加しました。1年生のステージ発表では、英語発表の楽しさを元気いっぱい全身を使って表現し参加者の皆さんから盛んな拍手をいただきました。独創性・表現力・アピール力の豊かさが認められ見事金賞に輝きました。また、2年生の英語暗唱発表でも落ち着いたスピーチができ、記憶力・英語力・表現力の素晴らしさが認められ銅賞を受賞しました。どちらも日ごろの努力が評価されたものと喜んでいます。この発表会は、学校における英語学習の成果を発表すること、お互いが交流することにより日々の英語学習の発展と表現力の向上を図ることをねらいとしており、本校英語科の日々の学習指導も評価されたものと考えています。

〓11月18日の附属桃山小学校の給食献立は MET「こどもの食」コースの生徒が考えました〓

11月18日の附属桃山小学校の給食献立は、本校2・3年生のMET「こどもの食」コースの生徒が考えました。9月に小学3・6年生にとった「食についてのアンケート」をもとに献立メニューをつくり、10月に実際に調理実習をおこなった上で、完成させたものです。もちろん小学校の栄養教諭や調理員さんの大きなサポートがあって完成した献立です。野菜の苦手な人にも食べやすい「野菜たっぷりハンバーグ」、あまり食べられない昆布を11月15日の「昆布の日」にちなんで食べてみようという「サツマイモと昆布の煮物」、あっさりして飲みやすい「卵スープ」の3品です。この献立メニューを考えた2・3年生のMET「こどもの食」コースの生徒たちは、18日に小学3年生と給食をともにさせていただきました。自分たちが考えた献立メニューが実際に小学校の給食となり、たくさんの小学生に笑顔をつくることに食の大切さを再認識しました。空になった食器を前に、小学生と共にすごした給食の時間はとても楽しく感じました。このことは京都新聞19日朝刊の記事になっています。

新任の先生から

数学科准教授　**深　尾　武　史**

「鋸（のこぎり）は、たいてい引く方向に刃がついていて、押すときでなく引くときに切れるんだよ」「金槌（かなづち）は、柄の先の方を持って振ることで、より大きな力で釘が打てるんだよ」と丁寧に道具の解説をされれば、「へーっ」と思うこともあります。しかし、鋸や金槌を目の前にして、その仕組みや便利さの解説を聞くだけではなんだか物足りません。実際に道具を使って木を切ってみたり、釘を打ってみたくなるものです。

使い方を知ることで、それまで無関心だった道具の仕組みや便利さにも興味がわくこともあります。すでに仕組みや便利さに興味を持っていた人にとっても、使い方を知ればさらに理解も深まりますし、そもそも道具の便利さを知るには道具を使ってみるのが一番です。

さて、中学校や高校のあの教科を思い出すと、確かに内容は洗練、体系立てられていて、教科書ではその仕組みが丁寧に解説されていました。理屈抜きに「美しい」「すばらしい」と思った定理もたくさんあります。しかし、道具としての使い方は全然体験できず便利だと思ったことはありませんでした。試験の問題を解くためにあるとすら感じていたときもありました。

あの教科の楽しさを伝えるとき、「美しい」「すばらしい」という側面を見せるだけでなく、現象解明の「道具」としての使い方も体験させられるように工夫したいと考えています。

教育学科講師　**西　村　佐彩子**

4月に教育学科に着任して、早いものでもう1年が過ぎようとしています。もともと関西出身なのですが、着任までは九州で過ごしていましたので、久しぶりに戻ってきた関西を懐かしく感じています。領域は臨床心理学を専門にしています。そのため、昨年度までは研究を続けながら、病院の精神科・心療内科や中学校といった複数の現場で心理カウンセリングを始めとした臨床活動に携わっていました。

ところで、カウンセリングの中で「はっきりさせたい」「ほどほどにできない」という訴えを聞くことがあります。学校や職場・家庭などの日常生活は未知の場面や矛盾した状況に満ちており、そのような曖昧さに居心地の悪さを感じるのです。けれども「割り切る」ことができないとき、曖昧さとどのようにつきあいこなしていくのか――このようなテーマについて臨床心理学的な視点から研究をしています。

京都教育大学に来てから、さまざまな出会いや発見、新しい学びの機会に恵まれていることを感じます。今後も共に学びながら教育に携わっていきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

国文学科准教授　**奥　野　久美子**

10月に着任しました。数年間九州の私大に勤めていましたが、久しぶりに学生時代を過ごした京都へ戻ってきて、懐かしくまた嬉しく思っています。専門は日本近代文学、特に芥川龍之介の作品を研究しています。文学を研究するということを仕事にしている私が、いつも心に刻んでいる言葉があります。関東大震災で東京の街が壊滅状態になったとき、当時の作家たちは、このような非常時に文学にいったい何ができるのかと考えました。芥川は小説をはじめとする芸術について、〈芸術は生活の過剰であるかもしれないが、人間が人間であるのは生活の過剰があるからこそだ。僕らは人間の尊厳のために、生活の過剰を作らねばならない。またその過剰を大いなる花束に仕上げねばならない〉という旨を書き残しました。衣食住や医療がなければ人は生きられませんが、文学はそのような存在ではありません。しかし、過剰のない生活は動物と同じ。芸術は人間の尊厳だというのです。

作家たちがこのような思いで残した作品を、後世に伝え続けてゆくこと、花束を枯らさないようにすることが、私たちの仕事であると考えています。将来、教師として生徒たちに文学作品を教える学生にも、そういった思いや責任感を持ってもらえたらと願っています。

数学科教授　**柳　本　　哲**

1月に着任しました数学科の柳本です。着任前は、私立大学で保幼小の資格をとる学生を相手に算数教育を教えていました。その前は、公立と国立大附属の中学校現場で数学を教えていました。京都教育大学では、初等算数科教育法や中等数学科教育法などを担当し、算数数学教育について学生の皆さんとともに考え研究していきたいと思っています。

私自身は、大学・大学院で位相数学（General Topology）を学び、学校現場で算数数学教育の実践研究に取り組みました。ブタペスト、ケベック、リスボン、ミルウォーキー等での国際会議に参加して発表を行い、その内容を洋書に掲載することができました。メルボルン大学教授との共著も明治図書から出版されており、啓林館の教科書「わくわく算数」「未来へひろがる数学」等の著者にもなっています。中高時代は剣道部で汗を流し、大学時代は社会人サッカーチームに所属して休日に活動し、教員になってからは、剣道部、卓球部、サッカー部、野外活動部などの顧問を経験し、生徒たちと苦楽をともにしたことが懐かしい思い出となっています。

残りの教員人生を、ここの学生の皆さんと切磋琢磨し、充実したものにしたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

子どもたちの“もっとしたい！”があふれる学習を目指して

野洲市立篠原小学校教諭　安　達　裕　美
（社会科教育専攻　平成16年度卒業生）

「え～！もう終わり？…もっとやりたい!!」

この言葉を聞いたとき、“うまくいったなぁ”と私は嬉しく思い心の中でうなずく。子どもたちが、自分自身の学びに手応えを感じていたり、まだまだこれでは不十分だからもっとがんばりたいとやる気を見せたりしているのだ。

日々の授業の中でこの言葉を聞くことはなかなか容易ではない。しかし、自分自身が「子どもに○○の力をつけたい」という思いを明確に持って学習活動を仕組んだとき、「できるようになりたい」という子どもたちの思いがぴたりと学習に重ね合わさって、冒頭の言葉を聞くことができているのではないだろうか。

京教では教師になるための基礎としての様々なことを学ぶことができたと思う。しかし、私が苦戦したのは、小学校専門教科の講義でたびたび出されていた指導案作成の課題。学習活動って？教師の支援って？と、授業のイメージは全く持てず頭の中はいつもハテナだらけで、とにかく指導書を参考に見よう見まねで書いている状態だった。しかし、3回生で行った附属小での教育実習で子どもたちを目の前にして初めて、ひとつひとつの学習活動、教師の問いかけは子どもにつけたい力を意識しながら仕組むことが大切なことを学んだ。教師の働きかけ次第で子どもの学びが良くも悪くもなることを実感した。私の、教師としての原点はここにあるように思う。

教師になってから国語の物語教材の学習をしたときのこと。自分の考えはしっかり持っているが、なかなかみんなに広めることができない子どもたちだったので互いに伝え合う力をつけたいと思ってペア対話や全体交流の仕方を工夫して授業を進めていった。すると、45分の学習が終わる頃、子どもたちから「もっと話し合いたい！」という声が上がった。私が心の中でにやりと笑う瞬間だった。

これからも、子どもたちの「もっとしたい！」があふれる学習を目指したい。

全てが意味のある時間

京都市教育委員会事務局・事務職員　合　田　清　香
（人間科学専攻　平成15年度卒業生）

卒業してからもう6年になります。

大学4年生の時に思い描いたとおり、希望する京都市役所の職員に採用され、教育行政の仕事に携わり、忙しいながらも充実した日々を送ってきました。そして、結婚、出産、現在育児休業中の身であります。

入学当初は特にこれといった目標もなく、とりあえずただただアルバイトと単位習得に精を出していました。そして大学3年生、就職を見据え大学と公務員試験予備校とのダブルスクールを始めました。1、2年生の時に大学の単位は取れるだけとっていたことが幸いし、余った時間とアルバイトで貯めたお金を、全て勉強に費やすことができました。

大学生活最後の半年間は卒業論文に費やしました。タイトルは「保育行政におけるワーキングマザー就労支援策」、自分の将来に役に立つ研究をしたいと思ったからです。近隣の保育園4園に協力をお願いし、保護者を対象にアンケートをとらせてもらったりしました。そこでいただいたご意見などは、自分が子供を保育園に預けて働こうとしている現在、改めて参考になっています。そして縁あって現在は保護者として、その時協力してくださった園でお世話になっています。

もちろん大学時代に出会った友人や恩師も私の大きな財産です。今では同じ働くママとして励ましあえる友人もいれば、仕事上でつながっている友人もいます。働く女性の見本として今でも子育てと仕事の両立について私にアドバイスをくださる恩師もいます。

大学生活を後で振り返って考えると、無駄なことはひとつもなかったように思います。先が見えなくてもその時その場所でできることを一生懸命頑張っていると道は開けてくるものだということが、大学時代の4年間で学んだ私の財産です。そしてそれは自分だけの力ではなく常に周りの人の助けがあってこそ開かれる道なんだということをいつも感じています。

現在、職場復帰を目前に不安や迷いもありますが、色んな方のサポートを受けながら、仕事も育児も今の私にできることを精一杯頑張っていきたいと思います。

私の思う教師道

元京都府立洛北高等学校長　坂　下　和　也

私の教師生活38年間を振り返ると前半の21年間はふるさとの宮津高校で充放電をしたが、後半17年間は打って変わって激動そのものの教師人生であった。特に校長時代は西宇治高校での単位制単独校スタート、開校15年目の南陽高校での進路実績等の充実、「京一中」としての伝統ある洛北高校の発展を目指しての学校経営に専念することができ、変化変動の中ではあったが、充実感や充足感を持つことができた。教師生活晩年は京都府公立高等学校長会長の役職にも就き、退職後も府立高等学校校長会事務局長を務めた。これらの教師生活を通して感じていたことの一端を述べたい。

一つ目は「鉄は熱いうちに打て」という視点である。このことは学校教育だけでなく、家庭教育、社会教育の分野でもいえることである。学校教育においては、個性が重視され、自主的・自律的な判断ができるようにすることが求められているが、その前提として学習や生活規範の基礎・基本が基盤としてなければならない。教えるべきときに教えないで時期を失すると手遅れになるとの思いをいつも抱いていた。幼稚園・保育園から小学校へ、小学校から中学校へ、中学校から高校へ、という節目を重視し、子どもたちが新たな学校文化を習得し、学力や規範意識などを身につけられるよう入学当初からの指導を徹底するということが重要ではないだろうか。自主性の尊重という心地よい言葉のもとで、子どもの発達段階や特性を考慮することなく、指導をしないことは、将来子どもたちが親となったときにどうなるかは明白であるだろう。

二つ目は教師自らの教育実践の反省と研修の大切さである。教師は子どもの具体的な存在をみながら、それにふさわしい指導を展開できる専門的力量を身につけなければならない。特に教科指導の力量は大切である。若い教師の時代は進んで授業を公開し、批評してもらうこと。これが授業改善の近道である。「よい授業」をつくることはベテランといわれる年代になっても教師である限り追求することではあるが、「これでよいか」という自己反省と研修による自己啓発の意欲がなくなれば、その人の成長は止まる。年齢相応に指導力が高まっていないと、教師個人だけでなく、学校に対する信頼を揺るがすことになる。「よく学ぶものがよく教えることができる」ことを肝に銘じたい。また教育課題が複雑さを増している状況では教師個人の専門的力量やパーソナリティだけで対応することには限界がある。学校は組織力で対応しなければならない時代になっている。個々の教師の専門的力量のベクトルが学校組織として達成すべき目標と同じ方向に一つになっていれば、学校の総合力としての学校力は高まる。教師個人の教育実践を学校の組織目標との関係で省察することも大切にしたい。

私は変革期の京都府において、進路指導の充実に向けて一途に筋を通して挑戦してきたとの思いが強いが、教師はさまざまな経験や出会い、出来事に直面する中で、教師としての感性や力量が加わると思う。「教育は教師次第」という言葉の重さも肌身で感じてきた。児童生徒に「人間としての生き方」を示し、教職に対する情熱を持ち続け、指導力量の向上を目指して自らの教育実践を省察する。このようにして児童生徒の「生き方」に直接関与していく教師の姿こそが教師道につながるのではないだろうか。

第 125 号の読者の皆さまへ

京都教育大学広報誌「KYOKYO」をお読みいただきありがとうございました。
より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。
広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522
京都市伏見区深草藤森町 1 番地
京都教育大学企画広報課気付「地域連携・広報委員会」
E-mail：kouhou@kyokyo-u.ac.jp

125 号編集後記

広報紙「KYOKYO」第 125 号をお届けいたします。本号の特集は『新制 60 周年記念大学改革シンポジウム』、『京教の歴史をふりかえる』の 2 本です。

戦後制定された教育基本法の施行により、「新制」大学として「京都学芸大学」の名で本学がスタートしてから昨年で 60 周年を迎えました。さらに前身の京都府師範学校（明治 9 年創立）までさかのぼると 130 年以上の伝統を持つことになります。この豊かな歴史をふまえつつ、特集でご紹介する「大学改革シンポジウム」でもふれられていますように、教員養成を軸とした大学として新しいチャレンジを続けなければなりません。どうかこれからも皆様のご指導、ご声援を賜りますようお願い申し上げます。

なお、今号の表紙を飾るのは附属京都中学校の鍋嶋一樹さんの作品、裏表紙は同じく附属京都中学校の奥西玲央さんの作品です。力強く、自由な線で描かれた迫力ある絵をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長　武蔵野　實

京都教育大学

地域連携・広報委員会

委 員 長	武蔵野　實			
副委員長	相澤　雅文			
委　　員	饗場　知昭	田中　里志	浅井　和行	延原　理恵
	杉本　厚夫	荻野　　雄	榊原　禎宏	富家　健治
事務担当	企画広報課			

京都教育大学広報 第125号

発行日
2010年 3 月25日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
http://www.kyokyo-u.ac.jp/